2021年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	田中 夕子
研究テーマ	平安時代の仏像と信仰に関する心性史―『土右記』『水左記』『後二条師通記』を中心に―
研究概要	仏教伝来より現在まで仏像を造り、祈り続けてきた日本の宗教文化の特質を明らかにするため、藤原道長の孫・曽孫世代である平安時代の貴族の日記『土右記』『水左記』『後二条師通記』の仏像関連記事を「修善」をキーワードとして考察して、仏像を造り祈る行為の背景にある環境（歴史、社会、習俗、宗教）と心性の形成と展開を解明する。

1．研究活動の概要と研究成果	今年度は、藤原道長孫～曽孫の日記（源師房『土右記』、源俊房『水左記』、藤原師通『後二条師通記』）において使用された「修善」という言葉を考察した。2019年度以降考察してきた道長『御堂関白記』、実資『小右記』において「修善」という言葉は、主に現世利益祈願を目的とした密教修法を指していた。 しかし、今回取り上げた3日記では、「修善」という言葉は『後二条師通記』に1例しかなかった。この時期、道長期に行われたような現世利益祈願を目的とした密教修法は行われていた。しかし、それを指す言葉として「修善」は使用されておらず、「修法」または具体的な修法名を記していた。 「修善」という言葉を使用しなかった理由は、道長期の「修善」は現世利益目的の密教修法を漠然と指していたが、3日記の時期では密教修法の発達・普及、そして、来世往生観の普及・深化が背景にあった。そして、貴族は多くの仏事に参加する中で、仏教知識を深めていき、それに伴い仏教的善業を修すること（「修善」）の意味を意識し始めため、3日記が書かれた11世紀後半には、道長期に使用された密教修法を漠然と示す「修善」という言葉は使用されなくなったと考察した。
2．学術論文・学会発表等	〈学術論文〉 単「平安時代後期における修善の展開」『印度学仏教学研究』第70巻第2号、pp.180～184、日本印度学仏教学会（2022年3月、査読有） 〈学会発表〉 単「平安時代後期における修善」日本印度学仏教学会第72回学術大会、（2021年9月4日、オンラインリモートシステム開催） 単「平安時代における修善」日本宗教学会2021年12月例会(2021年12月12日、オンラインリモートシステム開催）
3．今後の課題	「修善」という言葉が、現世利益を目的とした密教修法を意味するようになった時期は明らかでない。そのため、今後は時代を遡って平安時代の六国史及び『貞信公記』や経典、論書類を対象として、「修善」の使用例を検討していく予定である。そして、平安時代の「修善」の意義を改めて捉え直した上で、仏像を造り祈る行為の背景にある環境（歴史、社会、習俗、宗教）と心性の形成と展開を解明していきたいと考えている。